

「あけましておめでとうございます」

いつもいつもお世話になってます。本年もどうぞよろしく。近況報告も兼ね。最近の記事と2通同封しました。

朝日
新聞

2009年(平成21年)10月16日 金曜日

25 生活

人と交わり 語って前へ

発達障害と ともに

コミュニケーションに困難を抱える自閉症でありながら、公務員として働く男性がいる。息子の成長を本や講演などで発信し続けている母は、「発達障害の子どもが自立した生活を送るためには周りの協力が欠かせない」と話す。

川崎市立夢見ヶ崎動物公園に勤める明石徹之さん(36)。一日に2万歩以上歩き、園内のゴミを拾う。「お仕事楽しいです」と徹之さん。主任成園長は「仕事ぶりはまじめで安心できる」と評する。

17年前、川崎市の採用試験に合格した。老人ホーム勤務などを経て、今年4月から動物園で働く。

「小学校時代に普通学校のなかで多くの友だちと一緒に遊び学んだことが支えになった」。母親の洋子さん(63)はこう振り返る。

1歳のころ、「ほかの子と違う」と感じた。話しかけても反応せず、他人の家に勝手に上がってしまうなど奇異な行動が目立った。2歳10カ月の時、医師に自閉

「クラスの一員」として



症の傾向を指摘された。

「地元の人に息子のことをもっと知ってほしい」。速くにある養護学校(現特別支援学校)ではなく、近くの小学校に進ませることにした。

入学から1カ月ほどで落ち着いた。予防接種で同級生から「小学生は泣かないよ」と励まされ、初めて泣かずに注射を受けられた。父親の転勤のため、2年の春、

ゴミを丁寧に拾い集める明石徹之さん＝夢見ヶ崎動物公園

佐賀市の小学校に転校した。初めてのクラス会。ある保護者が「変わった子が転校してきた。どうして養護学校に行かないのか」と担任教諭に聞いた。だいたした。

洋子さんは涙をこらえ、「慣れれば安定してくる」と説明し、「家庭や地域から切り離さずに社会性を身につけさせたい。クラスの一員として認めてください」と訴えた。居合わせた保護者が拍手

助けられ共に育ち自立

で受け入れてくれた。

運動会のリレーに出た徹之さんは走らずにスキップした。同級生は「てっちゃんのおんまで頑張ろう」と巻き返し、1位になった。

洋子さんはこうしたエピソードを02年から05年にかけて3冊の本に著した。

現在、佐賀県内の小学校で教師をしている森隆久さん(37)は徹之さんの小学校時代の同級生。数年前、書店で偶然洋子さんの本を手にした。そこには森さんら同級生への感謝の気持ちが記されていた。森さんは「自らも徹之さんと一緒に学んだことで成長ができた」との思いを手紙にして洋子さんに届けた。

「いい友だちのお陰で徹之は伸びた。友だちも、徹之とかかわり成長できたと感じてくれるのはうれしい」と洋子さん。今後自閉症の子どもの育て方などについての講演を各地で続け、障害のある子どももいない子どもも成長し合える教育の広がりを目指している。

講演の問い合わせは、社会福祉法人「あおぞら共生会」(044-332-8736)へ。(太田康夫)